

視座

生かそう、地域生活史の核

農村景観資源としての木造校舎



東北公益文科大学
講師
松山 薫

故郷を離れて都会に生活する人が「ふるさとの風景」として思い浮かべるものは何だろうか。おそらく、山や川や海などの豊かな自然、田畑に囲まれた素朴な民家などであろう。それらと並んで、木造の学校校舎も欠かすことのできない要素と筆者は考える。

記憶の中の木造校舎

それは、農村を舞台としたテレビCMに、木造校舎が頻出していることから、間違いはなからう。最近でも大手通信会社や運送会社のCMがすぐ思い浮かぶ。また、各地の木造校舎を題材にした写真集も、特に一九九〇年代以降に多数出版されている。こうしたメディアに登場する木造校舎は、「昔ながらの」とか「懐かしの」という形容詞を伴って語られ、都市居住者のノスタルジーの対象として消費される。その結果、実際の農村出身者のみならず、農村生活を直接体験したことのない都市住民にとっても、木造校舎は「農村」、「故郷」、「幼少時」などを象徴する存在として確固たる位置を占め続けることになるのである。そうした意味で、農村の木造校舎は、茅草屋根の民家と並んで、農村の象徴景観とし

ての価値は非常に高いと筆者は考えている。

古き良き学び舎

歴史が蓄積された古い学校校舎はどれも魅力的である。たとえば、都市部における戦前期の鉄筋コンクリート校舎にみられる、他を圧するような威容には、当時の先端を走る誇りが感じられる。現在保存が図られつつある山形市立第一小学校はその好例といえよう。

一方、農村部の古い校舎はたいてい木造である。構造は奇をてらわない、シンプルな長方形である。それでいて軒や階段の手すりなどにさりげなく職人の技巧が凝らされていることもある。下見板張りの外壁には、時が染み込んでいる。特に農村部の場合、木という自然素材が外壁に用いられていることにより、建物が古びれば古びるほど、まるで校舎そのものまで自然の一部であるかのように周囲の景観に溶け込んでゆくのである。

近年問題になっているシックススクール問題も、こうした古い木造校舎の場合、後から不適切な改装を行わない限りは、縁のないことである。見た目も、実用上も、エコロジカルな建物なのである。

増える廃校とその転用

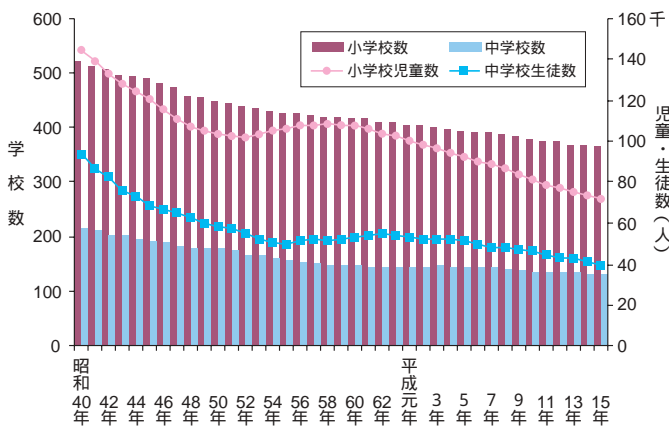
社会の少子・高齢化に伴い、全国で小・中学校の統廃合が進んでいる。これは地方の過疎地域のみならず、東京など大都市の都市部でもみられる。そこで、学校の統廃合により発生した廃校舎を、どう転用していくかが重要な課題となっている。文部科学省が行った調査によると、一九九一年度から二〇〇一年度までの十年間に、全国で小学校が千四百九十九校、中学校が四百七十六校廃校になり、その八割以上が何らかの別の用途に転用された。最も多いのは社会教育施設や体育施設で、自然体験施設などの体験交流施設もしばしばみられる。他にも福祉施設やベンチャー企業の貸事務所になったところもある。こうした中で同省は、公立小・中・高校の特色ある廃校活用事例を「廃校リニューアル五〇選」として選定した。選定対象は、あくまで既存施設の利用に限定し、廃校時の建物解体撤去され、跡地に別途新築された施設のみを用いている事例は除いている。これは、新規施設の建設と比較した場合のコスト面での利点だけでなく、建物の歴史的・文化的価値や、住

民が愛着を持つ地区のシンボルとしての価値を考慮する必要があるという考え方の反映でもある。ちなみにこの「五〇選」には、山形県からは、白鷹町と酒田市から各々一件ずつ選出されている。

木造校舎という身近な宝

山形県の生徒・児童数は、図1に示したように、第二次ベビーブームの一時期を除き減少を続けている。それに対応して小・中学校も統廃合が進み、平成十五年には、三十八年前の昭和四十年に比べ小学校は約三割減の三百六十七校、中学校は四割弱減の百三十五校となった。さらに平成十六年三月には、村山市の三つの中学校が統合された。

図1 山形県の児童・生徒数と公立小中学校数



注：児童・生徒数には、国立小学校1校、国立中学校1校、私立中学校1校（平成元年～）も含まれる。
資料：山形県学校名鑑。

こうした統廃合の過程で当然多くの廃校舎が生まれた。筆者の鶴岡市の住居近くにも、平成九年に廃校になった美しい木造校舎が残っている（旧鶴岡市立西郷中学校）。筆者自身、木造校舎がほとんど絶滅した東京から移住してきたため、それに対しては憧れが先立ち、冬季の厳しさなどの不利な点を十分認識していないことはわかっている。しかし正直なところ、初めてその廃校舎を見たときは、宝物がさりげなく野辺に置かれている、といった風情に息をのんだ。何十年もの歴史を刻んだ風格と、不良少年もグレ甲斐のなさそうなのどかさどが、絶妙に調和をみせるたがずまいは、まさに垂涎の逸品。もし中学生に戻ってここで勉強できるなら冬寒くても我慢できると思った。ところが地元住民組織の広報紙を見ると、この旧校舎は老朽化し危険である、暴走族のたまり場になる恐れもあるので早く撤去してほしい、との声が掲載されていた。自分の見方はやはり外来者のそれであつたかと思ひ知りつつも、そのままの校舎をなんとか活かす可能性が模索できないものか、というささやかな想いは消えない。

地域の核としての学校

小・中学校は地域社会の核の一つとして機能し、運動会などの行事や地域活動を通じて、世代を超えた住民の交流の場を提供する。特に農村部ではその傾向が強い。たとえ従来の小・中学校としての役割は終えたとしても、なお人が集まり、にぎわう場所であつて欲しい。そんな想いが、各地の「廃校リニューアル」の事例からは伝わってくる。

このことは、農村の景観の一要素である木造校舎を考えるうえでも、重要な点を含んでいる。景観は、一朝一夕に「整備」してできるものではない。長い時間にわたる個々の景観要素の積み上げの結果、総体としての景観ができていくのである。景観は地域の人々の生活史そのものであり、この意味でやはり木造校舎は農村景観の一つの象徴といえる。木造校舎を生かすことは、地方農村が既に持っている価値をよりアピールする一つの手段にほかならない。

図2 旧鶴岡市立西郷中学校（画・筆者）



松山 薫
(まつやま・かおる)

お茶の水女子大学文教育学部卒、
東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了、博士（学術）。
専門は地理学。
明治学院大学非常勤講師等を経て
2001年4月より現職。
鶴岡市都市景観形成推進委員会委員等を務める。鶴岡市在住。